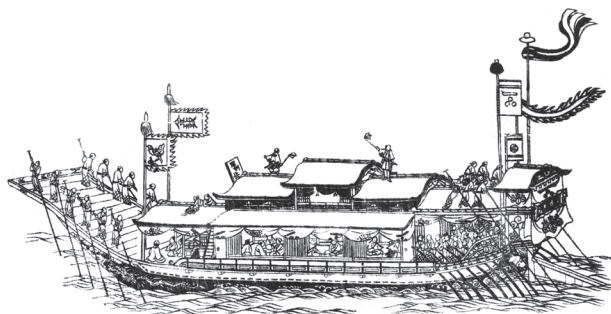


KEYワード

第105回

御座船の系譜が町なかを走る だんじりから彫り込まれた船の記憶



川御座船「摂津名所図会」より 屋根の上には、采配方の姿が見える。

大学生時代、江戸の面影を残す東京下町の祭りで連打される太鼓に感銘をうけたことがある。文楽「夏祭浪花鑑」で知られる高津宮(大阪市中央区)の祭りで、だんじり(地車)囃子に慣れ親しんでいた私には、大太鼓がドンドンコ喰る重低音が、板東武者を乗せた馬の群れが関東平野を駆けめぐり、大地を揺るがしながら押し寄せてくる感じがし、反対に大阪でかん高く「ヂキヂンコンコン」と打ち鳴らされる鉦の音に、西日本らしい海洋のイメージが浮かぶようになった。

『大阪検定公式テキスト』にも執筆する篠笛奏者の森田玲さんとそんな話をしていたら、だんじりとは「天神祭を発祥として大坂三郷域の夏祭で発達した神賑行事の練物」で、摂河泉を中心に瀬戸内から九州にまで伝わり、その源流は、江戸時代に淀川で用いられた幕府や西国大名の「川御座船」だと教えられた。

円山応挙も淀川を航行する川御座船を描いたが、森田さんも執筆する『図説だんじり彫刻の魅力 岸和田と淡路で育まれた心と技』(だんじり彫刻研究会編、2019年)によると、『摂津名所図会』の挿絵のように御座船の多くは二階建てで、豪華に漆や飾り金具で装飾されていた。船体部分は船大工、飾りのある屋形は宮大工が作った可能性があるとする森田さんの推測に、なるほどと感心した。

川御座船(別に海御座船もあった)を模したのが天神祭の御迎船で、陸にあげて町内を曳行したのが、大阪市立住まいのミュージアムに展示される「天神丸」(大阪天満宮蔵)など御座船型曳車である。そして「天神丸」から船体部分を取り除いたのが、だんじりの原型だという。

人類のご先祖は、長い年月をかけて海から陸へ上陸したが、どことなくそれと似た? - 水上から陸へとあがり、今日のだんじり誕生までの系統樹が浮かび上がってくる。

調査では、岸和田のだんじりにも御座船の名残が認められるという。上下二段の大屋根・小

屋根は御座船を意識し、旗や吹き流しも御座船と共通する。だんじり最下部に位置する「水板」と呼ばれる部分に伝統的に水に関する彫刻を施すことで、船のように浮かぶイメージを演出し、四隅にある「松良」という部分の名称も和船用語に由来する。

屋根で舞ってだんじりの舵取りを指示する「大工方」も、『摂津名所図会』の御座船屋根に描かれた采配方に似るし、だんじりの後から差し込まれる「後艇子」の左右に張られた綱を「ドンス」と呼ぶのも、『和漢船用集』にある和船用語だという。

近著の『図説だんじり彫刻の魅力』のほか、森田さんの『日本の祭と神賑 - 京都・摂河泉の祭具から読み解く祈りのかたち』(創元社、2015年)は、だんじりや布団太鼓などを図解入りで分かりやすく解説した好著であり、祭りを知ろうえでとても参考になる。

話はもどって、「ヂキヂンコンコン」に海洋的な雰囲気を感じる私だが、同じ大学生時代(もう40年も昔)、天神祭宵宮の帰りに天神橋を渡っていると、川岸に係留された船からだんじり囃子が流れてきた。

リハーサルなのか、本番とは違った寛いだ様子で、鉦の音は風に揺らいで波打ち、きらきら輝くような響きがインドネシアのガムラン音楽のようでもあった。むっとした熱気のなか、水を通して大阪は、広くアジアにつながっていることを実感した。



岸和田の地車のやりまわし。屋根に乗る大工方が指示を出し、後艇子のドンスで大きく舵を取る。(写真提供: 森田玲)

筆者プロフィール

橋爪 節也 はしづめ せつや

大阪大学総合学術博物館前館長/大学院文学研究科教授。1958年、大阪市生まれ。東京芸術大学大学院修了。大阪市立近代美術館建設準備室学芸員を18年間つとめ現職。専門は日本美術史。展覧会では「没後200年記念木村兼霞堂一なにわ 知の巨人」「北野恒富展」「没後80年記念佐伯祐三展」などに携わる。編著に『大大阪イメージ増殖するマンモス/モダン都市の幻像』(創元社)など。